

I 学校の概要

学力向上モデル校事業（外国語教育推進モデル校事業）

直島町立直島中学校

◆生徒数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
1学級 15名	1学級 14名	1学級 17名	2学級 2名	5学級 48名

○教員数 13名

◆学校の特徴

近年、直島は「現代アートの島」として世界の注目を集め、国内外から多くの観光客を迎えるようになり、日常的に外国人を見かけるようになってきている。そのような中、生徒たちは、異なる文化や考え方をもつ人々と交流していく機会が多くなっている。

直島町では、昭和63年度から町独自に外国語指導助手（ALT）を雇用して英語教育に取り組み、平成23～25年度の3回、文部科学省指定研究開発学校として研究を推進し、平成28年度からは、教育課程特例校として外国語の時数を増やして英語教育に取り組んできた。また、「話す・書く」の2技能を中心に発話と書くこととのつながりを大切にした英語活動の取り組みや、その発表のためにタブレット端末を積極的に活用しながら、互いに学び合う学習を通して、直島の特色ある教育活動である英語教育を元に、郷土を愛する心を育むこともめざしている。

II 研究主題等

研究主題

「コミュニケーション能力と豊かな国際感覚の育成」
～ 即興性のあるやり取りとICTを活用したペア・グループ活動の実践を通して ～

◆研究主題設定の理由

本校では、教育課程特例校で実践を重ねている強みを生かして、学習者用デジタル教科書を活用した個別最適な活動で生徒の英語力の底上げを進め、即興性を取り入れた言語活動とともに、自分の思いを言葉や態度で表すことができるようなコミュニケーション能力を身につけることを目的とした授業実践を行っている。そして、それらの学習の成果を試す場として、県内からALTを招き、生徒が英語でのコミュニケーションを図る「Meet the World」を開催し、ALTとの交流を通して国際感覚を養うことができるようにしている。

これらの取り組みに、オンラインで海外の中学生（同年代）とリアルタイムで交流の場を設定することで、更なる英語教育の推進（発信力の向上、英語学習への意欲向上、異文化理解の促進）をめざすと共に、教員自身が英語によるコミュニケーション活動への理解を深め、指導の個別化や一人ひとりに応じた学習の個性化を図っていきたいと考えた。

◆研究内容

- ① 話すことと書くことを関連付けた効果的な取り組みについて
- ② 即興的なやり取りを続けるための言語活動の充実について

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組み

指標A：国際交流を通して「話す」力の向上に役立ったと思うか。

(児童・生徒)「①とてもそう思う+②そう思う」の合計



指標B：国際交流を通して「書く」力の向上に役立ったと思うか。

(児童・生徒)「①とてもそう思う+②そう思う」の合計



1. 指標A・Bの達成に向けた実践【音声（話すこと）と文字（書くこと）を関連付けた手立て】

本校では、誰もがもれなく学び合う協同的な学びのスタイルを取り入れた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組み、分かる授業、考える授業、助け合う授業の創造に努め、学ぶ喜びを体得させることで、学級にいるすべての生徒が一人残らず参加できる授業をめざしている。

また、教育課程特例校の研究を続けている中で、中学校卒業段階で「自分たちのことや地域のことを話題にして、英語でやりとりができる」生徒像を実現するため、小学校6年時は週2時間、中学校英語科教員とALTで指導を行っており、小中連携を進めている。中学校では、外国語140時間に、新たに「総合的な学習の時間」から20時間を充てることで、すべての学年で年間160時間指導している。

その中でも幼児学園・小学校と培ってきた英語力を基盤に、英語を話すことに抵抗がなく、積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒たちであったが、「書く」活動には抵抗を示す生徒が多く、4技能のうち苦手意識を持つ割合が最も高かった。そこで、音声と文字のつながりを意識した取組みを行った。

まず、帯活動として行っている「Pair Talk」である。(Fig. ①)こちらが提示した話題についてマッピングを使って自分の言いたいことや情報を整理し、その後1分間のPair Talkを行い、2分で自分が話したことを文字化する。習慣化して行うことで「使える」表現を増やしていくことができ、話す内容が充実するとともに、書ける語数が目に見えて増えていくため、書くことが苦手な生徒も楽しんで活動している。このように自己調整を繰り返しながら、「使える」表現を身に付けていく姿がみられた。

次に、学習者用デジタル教科書の活用である。(Fig. ②)教科書の本文理解の後に行い、デジタル教科書の音読機能やマスク機能を用いることで、音声と文字を関連させて理解できるようになった。この活動も習慣化して行うことで英語力の底上げにもつながり、個別最適な学びを促すことができた。

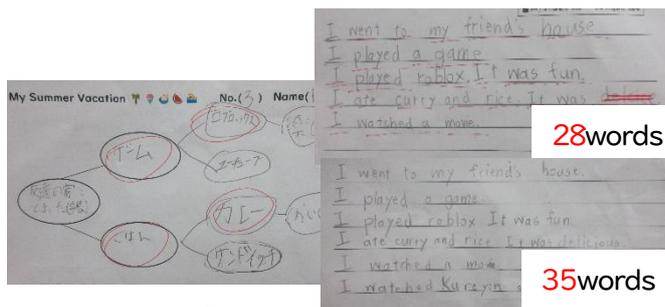


Fig. ①



Fig. ②

◆指標設定と達成に向けた取組み

指標 C：国際交流を通して英語をもっと上手に話したいと思ったり、世界中の文化や生活について知りたいと思っただか。

(児童・生徒)「①とてもそう思う+②そう思う」の合計



指標 C の達成に向けた実践【即興的なやり取りを続けるための手立て】

本校ではこれまで学習の成果を試す場として、毎年 11 月下旬に県内や岡山県から ALT を招き、美術館の作品や道中にあるアート作品、お店など、ふるさと直島について英語で紹介し、生徒が英語でのコミュニケーションを図る Meet the World を開催している。ALT との交流を通して、実践的に英語を使う場があり、授業で学んだことを試したり、発揮したりすることができる機会がある。今年度はそこに海外交流が加わったことでさらなる厚みが生まれ、実践の場で失敗や成功の経験を重ねながら生徒自身の英語力を磨いていくことができた。

Meet the World に向けてこれまで取り組んできたことを活用しながら、同年代の海外生徒との交流を意識して改善に取り組み、実践していった。

まず、Reaction シートと Free Talk シートを使った相づち・Q&A 練習である。相づち練習では、相手国にちなんだシチュエーションを想定して相づちをうつ練習を行った。このように想定問答を反復して練習することで自分の知識が増え、コミュニケーションをする上での選択肢の幅を広げることができた。(Fig. ③)

また、海外交流を行う際に仲介業者の World Classroom が運営しているデジタルコンテンツも活用した。音読機能・AI 機能を使った反復練習である。自分の音読スコアや AI との会話がアクティビティログに残り、可視化されることで、自分で目標を設定して練習に取り組む姿が見られた。(Fig. ④)

最後に、Q&A 練習では相手国の生徒たちに質問したい事柄を自ら追加することで、国際交流により目的を明確にして取り組めるようになった。(Fig. ⑤)

Situation	Reaction	Let's try!
My favorite food is bread.		
Sometimes, you can see tigers in India.		
Cricket is a popular sport here.		
We speak many languages in India.		
Bollywood is in India.		
I like Ghibli movies.		
Can you teach me Japanese?		
Do you know the Ganges River?		

① Wow! / What? / Oh, no! / Really? / Sure. / I don't know!
 ② Sounds fun! / Sounds good! / Sounds delicious!
 ③ That's cool! / That's interesting!
 ④ Me, too. / I think so, too. / I like it.

Fig. ③

Friends No. () Name _____

11 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 A: What do you like about Japan?
 B: I like Japanese anime.

12 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 A: Please tell me an easy Indian word.
 B: धन्यवाद (ダンニヤワード), it means "Thank you."

11
 A: 日本の何が好きですか。
 B: 私は日本のアニメが好きです。

12
 A: 1つ簡単なインドの言葉を教えてください。
 B: ダンニヤワード、意味は「ありがとう」です。



Fig. ④

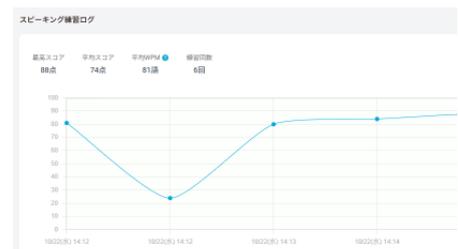


Fig. ⑤

◆指標設定と達成に向けた取組み

次に、ALT とのプレ海外交流を行った。交流に向けて、本番により近い形でリハーサルを行うものである。生徒をブレイクアウトルームに振り分け、ALT や英語科教員と話すだけでなく、生徒自身も相手国の生徒の立場で模擬練習を実施した。画面にうつる自分たちの表情や声の大きさに関する気づきに加えて、リアクションの取り方や会話の続け方についてなど、自分たちを相互評価する機会につながった。このように本番を想定した練習を積み重ねたことで、足りていない部分を本番までに修正・改善できるなど、生徒・教員双方の自信につながれたことがとても良かった。(Fig. ⑥)

最後に、海外交流やMeet the Worldに向けた、日本語を話さずに英語だけを使うというルールのもと、グループごとに競う活動である。この活動は3年前から、「英語で伝える機会」を生徒たちに作りたいという思いから始まった。決められた材料のみで工作をし、勝敗を競い合う。ほしい材料があれば他のグループと交渉をするなど、実践的な場面を設定することで、よりリアルに英語を話すことができた。今年度は段ボールを用いてトラックを作り、どれだけボールが転がるかを競い合ったRace Trackを行った。活動後のアンケートでは、こちら側が英語を話さざるを得ない状況を作り出したことで、「どうにかして英語で伝えたいという気持ちになった」という声がたくさんあった。また、この活動を1年生の頃から続けてきた3年生は、「最初は単語でしか相手に伝えることができなかったけど、だんだんと文で伝えることができるようになった。」などという感想をもった生徒がおり、英語を使用するリアルな実践の場面を設定することや、その活動を継続的に行うことの大切さを実感することができた。(Fig. ⑦)

そして、このような系統立てた取り組みを経て、生徒たちは本番を迎えた。そこでこの活動を通して、次のような感想を得た。

〈7月に行った第1回海外交流〉

- ・ 韓国は日本と同じで、学校のルールでスマホがダメなことが知れました。また、韓国と日本で学校行事も全然違うことが分かりました。
- ・ 日本も海外も関係なく、自分の思いを相手に伝えるには積極的に話すことが大事だと思いました。
- ・ まず、同年代の生徒さんたちと一緒に話してきたことが、うれしかったし、楽しかった。

〈10月に行った第2回海外交流〉

- ・ インドとの交流でナンの大きさを聞くことができ、自分が思っていたよりも大きくて驚いた。
- ・ 前よりも話が続いて楽しかったです。日本と台湾の違いが分かって楽しかったです。
- ・ 初めは緊張していたけど、相手の人が明るく接してくれて楽しく交流ができました。少し戸惑ったところもあったけど、もう一度言ってくださいと問いかけて、会話をつなげることができました。



Fig. ⑥



Fig. ⑦

IV 研究の成果と課題

◆成果

まず、成果として挙げられるのは、目的を明確にした系統だった取組みができたことである。海外交流を単元の中に組み込み、目的をより明確にした上で日々の授業に取り組むことができた。また、授業づくりにおいても単元で学習する文法などを具体的な使用場面を考えながら生徒に習得する機会を与えることができた。生徒自身も今日の授業で習った文法を使って海外の生徒に質問してみたいなどと発言する生徒が増え、生徒のモチベーション向上にもつながった。

本校では、幼児学園・小学校で培ってきた英語力を基盤に、日々の授業で音声と文字を関連させた活動を習慣化して行うことで、4技能を統合的に学習することに努めてきた。さらに、Meet the Worldのような実践的に英語を使う場があることで、それに向けて即興的なやりとりを継続して反復練習し、英語で発信する力を高めている。本番では、リアルな実践の場で授業で学んだことを試したり、発揮したりすることができた。今年度はそこに海外交流が加わったことで、さらに理解の深まりが生まれ、系統だった取組みができたからこそ、生徒も私たち教員も目的やゴールが明確となり、そのために日々の授業でどのような力を生徒に付けさせたいのかを考え、実践できた。

次に、実践の場を経ての教員・生徒の気づきである。例えば、Meet the World後のアンケートでは、「一つの話題について長く会話を続けることができた。」といった回答があった一方で、「昨年も同じグループでしたよね！と言いたかったけれど、うまく英語で表現することができなかった。」といった回答があった。それらの課題を授業の中に反映し、生徒に意識付けさせ、重点的に反復練習を行ったり、ワークシートを改善したりすることで、生徒の理解を促したり、教員の授業づくりの見直しにつながりすることができた。

最後に、同年代の生徒との交流を通じた失敗や成功の体験を生徒が得られたことである。今までALTとの交流は経験していたが、同年代の生徒との交流は今までにない楽しさを味わうことができたのではないかと考える。海外交流後の振り返りでは、「あの年で巨人の星を知っていました。日本のアニメはインドでも流行っているんだなと思いました。」と書いている生徒がおり、共通の話題で盛り上がったことや日本の文化が海外で知られていることへの誇らしさを感じていた。「言葉が繋がったら会話が明るく、楽しくなる。次ももっと日本のことを世界に教えたいし、世界のことももっと知りたい。」と書いている生徒もいた。コミュニケーションをとる楽しさの神髄を実感しているようだった。このように、実践を通して自信につながったことや、それだけでなくうまく伝わらなかったことや聞き取れなかったことなど、失敗の経験もすべて自分の糧にして、日々の授業に取り組む生徒の育成に努めることができた。

◆課題

海外交流やMeet the Worldに向けて、即興的なやり取りを続けるための実践を進めてきたが、会話を広げていくことに関しては課題がある。相手の話すことを聞き取るリスニング力の強化が必要であり、相手や相手国に興味を持って会話をすることが必要不可欠であると感じた。自分たちの好きなこと（アニメや歌手など）から共通の話題を見つけて会話をすることもそうだが、初めて知ったことや相手国の文化などについて自分ならこう思う、日本ではこうしているなどといった考えや意見、感想などを述べることで会話の広がりを生むことに気づくことができた。自分の意見を持ち、相手につないでいくことが必要である。そのためにも、自分の考えを伝える活動を帯活動などで取り入れ、反復練習をすることで、即興的なやり取りをするためのさらなる底上げをはかりたい。

また、へき地校の特性として、教職員が約3年周期で異動となる。そのような環境の中で、今後も系統的・継続的な質の高い授業実践を維持していくために、即興的なやり取りを続けるための言語活動の充実に継続して取り組んでいきたい。さらに、Meet the Worldのように英語科教員だけでなく、他教科との横断的な連携についても研究を推進していきたい。